

横たわった少女を思わせる「メッチェン山」(松江城天守閣から)



旧制高生 あこがれ込め

標高約六十メートルに相当する松江城天守閣から、松江市街地東部を望むと、頭を南にし、あおむけに寝た人の形に見える連山がある。顔の部分が和久羅山(標高約二百六十メートル)、首から下が嵩山(同約三百三十メートル)で、山頂付近が豊かなバストに。ドイツ語で「女の子」を示す「メッチェン山」とは、よく言ったものだ。

仏様が寝ているようでもあり、昔から市民に「寝仏山」と親しまれた。一帯は県立自然公園に指定され、嵩山頂上からのパノラマは絶景。小泉八雲も登ったこの山を、こんなハイカラな名で呼んだのは、ふもとの旧制松江高(現・島根大)の学生たちだった。

「男子校でしたからねえ、あこがれにも似た思いがありました。『いつかあのような

メッチェン山

麗しい人と……』とね。思い入れが強かったから、今も絵に描くんですよ」と一九四五年入学の島根大名養教授、西上一義さん(78)(松江市奥谷町)は笑う。

「当時、松江高の東側には田んぼしかなく、真正面に横たわった少女のような嵩山などが見えました。ドイツ語が必修でしてね、どの学生も会話の中で割と普通に使ってた。例えば、『エッセン(食事)』とかね。一般市民と違い、学生には身近だったんですね」

三十九年入学の同、竹原敏夫さん(81)(同)は振り返る。同校でドイツ語を教え、この写真を撮影したフリッツ・カルシュが、日本を去ったのは同じ年だった。

鳥取・境港方面の漁師や釣り人からも、中海をはさんで

「キューピー山」との愛称で市出身で、同校で図工を教え呼ばれる連山。旧制松江高同窓会が九〇年に発行した校史「嵩のふもと」には、出雲



現在と比べ、人家も少なくすっきりしたふもと
(若松秀俊・東京医科歯科大学大学院教授提供)

島根の記憶

⑦